

旬じょうはん

情勢判断学会 東京本部
会員向けニューズレター
発行人 古川 彰久
事務局 〒252-0321 神奈川県
相模原市南区相模台1-23-9
Tel.&Fax.
042-748-8240
<http://www.jouhan.com>
E-mail:info@iki2life.com

6月例会ご案内

日時 : 6月9日 木曜日
18:30 ~ 20:30
場所 : 港区立産業振興センター
10階 会議室3
会費 : 1000円
テーマ : 「脳力開発と日本経済」テープを聴く
演者 : 松本 友

ラジオたんぱにおける、たんぱ経営セミナーで取り上げられた「脳力開発と日本経済」シリーズのテープを入手しました。今まで我々は書籍を通じて学んで来ましたが、城野さんの語り口も魅力の一つだと思っています。まさに脳力開発を体現された方だからこそ、だと思のです。テープの状態が心配ではありますが、城野さんの肉声から学ぶ機会を持ちたいと思います。控えめに言って超絶面白い内容になっています。

1 本目の内容は脳力開発について、インタビューされる流れで語られます。いつもの城野節ですがとても面白い。以下、概略です。

あらゆる行動は脳の指図で動く。経済活動も結局脳みその活動でしかない。政治活動もすべて同じ。なので脳みそをうまく使えばうまく行けるわけで うまくいかないということは脳みそをうまく使えていないだけ。

頭を活用する方法とは：

140億個の脳細胞が詰まっている。そこから60本の脳神経が出ている。隣と隣をうまくつなぎ合わせる作業を毎日毎日やっていけば、140億がうまく動き出してもものすごい数の無限のことがこなせるようになる。

140億もの脳細胞を少しだけ使うと加熱してしまうけれど、すべて使うと加熱しない。その代わり日頃から沢山情報を入れておかないといけない。

情報を入れておくという心掛けが必要。

専門家になってしまっはいけない。何でもかんでも頭に入れて、たくさんのデータを使う癖をつける。

人間は手と足と口を動かすことだけ。人間はできることをやればできるけれども、できないことをやるとできない。例えば経済を発展させようというのは人間の活動なのでやることはできる。会社が潰れそうだというのは、潰させたいのか発展させたいのか。潰させたいと思えば潰れるし、発展させたいと思えば発展する。どんな風に頭を動かしたらいいかの違い。

みんな見せられたところしか見ない癖がついている。有名なハイライトの箱の色の話を例にとって説明が出てきますが、実際にこういう風に城野さんが話していたのかと聴くと何度でも話してもらいたい内容かつ現代にも通用するお話です。

ハイライトの箱の話から派生する解説で、病院で健康診断をするのには心臓・肝臓・肺などすべて見て判断するのに、なぜハイライトだと皮膚の部分しか見ないのか。手にとって見れば前後左右を見ることが出来るが 手に取らなければ見せられている部分しか見れない。つまり頭を使っていない。手と足と口を使うというのが頭の働きと言える。

そういったことがわかるようになると、物事を全体的に見るようになる。見る角度によって変わってくる。上ばかり見てるとしても、下があるから上がある。右があるということは左がある。なので前を見せられたら、後ろを見るよう動かなければいけない。

仕事に置き換えて考えたとしても納得する話です。

まだまだ始まりに過ぎない概略です。城野さんの話しぶりの魅力が炸裂、楽しく頭に入るテープだと思えます。

4月例会報告

日時 : 4月14日 木曜日
18:30 ~ 20:30
場所 : 港区立産業振興センター
10階 会議室3
テーマ : 城野先生の「状況判断の行動学」
の第二章「脳活用の東西比較」の前半
演者 : 鵜殿 博文

今回は、日本人の脳反応の特殊性に関しての項目でした。その脳反応を理解するために他の国の文化の違いからそれを勉強しました。人間の脳の作用の二つの選択肢からなっている。一つは自分で変えていく。もう一つは人にしてもらおう。特にユダヤ教やイスラム教は多数の民族との抗争が多かったため戒律が厳しい宗教でありました。そのため、戒律を守るものが仲間を守らないものは敵であると区分していました。そのように敵味方の区別を作り集団を作ることで宗教が発生しました。

住居に関しては牧畜を主とした地域では、他を受け入れない家族単位では生活をしていたのに対して、日本は農耕社会であったため、個人ではなく集団で生活する協同体ができあがっていた。

そのような状況があり日本では中央集権が確立した頃に日本には仏教が入ってきました。その頃は蘇我氏が争いに勝つために仏教を利用していたと言われていました。日本の中央集権は地方自治の上に成り立っていたため、西洋から見ると非常に懦弱した政権とされていました。

日本は明治以前に外国と接触したのは元の襲来と秀吉の朝鮮出兵の2回だけであった。中近東やヨーロッパと比べてかなり少ないです。明治維新後に日本が欧米の知識を吸収し、近代国家の建設を行い成長してきました。また第二次世界大戦では焼土化したが、給食に立ち直りました。それは日本人が単に「勤勉である」とかエコノミック・アニマルであるというだけでは理解できない。それは日本人が数千年来、組織的社会活動に習慣してきた。日本人が勤勉で協力して生きるという習慣から出来上がった脳反応により成し遂げたものといえます。

日本人の脳反応の特殊性は言語の構成にも現れています。英語は“I want to give him book”のように所有関係の移動をハッキリと表現し

ています。ヨーロッパの言語も同じような感じですか。日本語の場合は「本をやる」という言葉で終わってしまう。「私の本」・「彼に」などの所有関係は現れてこない。これはどちらが良くということではなく捉え方の違いだけです。これはヨーロッパ等の国々は個人の所有を強調する文化であるために出来たことと言えます。逆に日本は皆が強調する。社会を組織をとるという感覚が強いため、個人を主張しない構成になったといえます。

日本人の教育は千年余り昔から一部の貴族だけではなく、庶民にまで及んでいました。ヨーロッパでは庶民は文字が読めなかったため、ラップで人を集める。役人が布告を読んで聞かすという状態でした。明治の日本が徳川時代から受け継いだ遺産は文字が読める民衆の社会であったといえる。そのため日本ではヨーロッパの技術を持ち込んで、早くその技術を根付かせることが出来ました。

組織社会とは、ヨーロッパ流の一人の命令に盲目服従というのではない。組織の戦略目標ははっきりすると各人がその目標を達成するための自分の役割を判断して動くことです。日本では太古から地方自治を核心として政治が運営されてきたので、そのような教育の基礎ができた組織社会を営まれてきました。最近では日本人とヨーロッパの人の脳の置き方が右と左が客になっているという意見がありますが、粗言う事ではなく脳の作用や反応の差異は社会活動の中に表現されて出来上がったものが大きいといえます。

脳の活用に関して今回は学びました。このような事を深く考えたことがなかったのでとても難しい内容でしたが、自分が生きてきた環境だけではなく、脳の反応は人類が誕生してから過ごしてきた生き方を受け継いで出来上がったものであるとわかりました。

